

B：宮城県コース

高橋 英子（1978・産社）

南三陸の海は、何事もなかったようなおだやかな波、表情で私たちを迎えてくれました。バスガイドさんは採算「こうしてみると、本当に1年7ヶ月前の震災は、奈美ごともなかったかのようにみえます」と。車窓越しに点在するガレキの山は、まさに、私たちに、あの震災の爪あとを語る風景でした。

2日目に、本来はバス通過で過ぎるはずだった南三陸町防災庁舎前を撮影させてほしいとお願いして5分間の停止。鉄骨だけになった庁舎、花々が供えられている正面玄関であったろう場所で参加者それぞれに祈りました。つなみの大きさ、地震の大きさを、じん大なる被害の爪あとをこの目にやきつけました。

ましてや報道で何度も何度も目にしたこの光景、1年7ヶ月たってようやくこの地で手をあわせることができました。

参加者の方々がそれぞれに、校友会視察ツアーという大義名分の元、やっと来れることができたといわれていた声に、私自身もうなづきました。仙台在住の姉一家が被災し、物資支援でしかサポートできなかった。何か後めたい気持ちを引きずりながら、いつの間にか訪問しなければという、タイミングの中での校友会の応援ツアーでした。同年代の女性校友と現状交流、石巻木の屋木村社長、名取市のささ圭の佐々木ご夫妻からのあたたかいおもてなし。こぼれるような笑みに迎えられて、逆に、私自身が希望を頂きました。仙台では、道行く人に「大阪へ帰ってこの状況を伝えてください」と声かけられた。風化させずに語り継ぐ大切さを痛感させられた旅に感謝します。ちなみに下村会長の町内会に姉の家はあります。